2年前の福島第一原発「現地調査」

2018年6月25日、宮本憲一先生ゼミ卒業生らで福島第一原発を現地調査した。前日、いわきに集合して浪江町など被災地域を回った。この日は東電担当者から説明を聞き、見学用バスで第一原発構内に入った。身分証明書などを差しだし、ヘルメットとマスク、チョッキなどを身につけ、構内を回り案内の人の説明に耳を傾けた。首から垂らしていた線量計が、たえず気になった。これでも放射能の値が高いときに比べて、かなり軽装備になったそうである。

構内の写真撮影は、厳重にチェックされ、「代表撮影」(加藤正文さん撮影)だけが許可された。写真上は説明を聞く宮本先生ご夫妻や参加者。その下の写真は、破壊された原子炉建屋を呆然と眺める私。

1 号機と 2 号機の間を通る時などは、バスの中でも高い線量が警告され、恐怖を覚えたものだ。汚染水の巨大なタンクが至る所で目についた。現在、この膨大な水処理をめぐり重大な局面を迎えつつある。

2日間の福島第一原発「現地調査」から、じつに多くのことを、この目で学んだ。帰宅してから、連日レポートを書いた。7月4日に書いた「福島原発をゆく(6)」に、次のように綴っている。

原発が生きている。1～3 号機に近づくと、急に放射線量がぐんと上がった。まだ危険極まりない状況だ。廃炉に向け、長い時間、技術が必要だろう。原発 4 基だけで、国土と多くの人の生活を破壊した。このことの意味、被害の大きさを自分の目で確かめること、原発の被害地域を実際に歩いてみることが大切だ。

宮本先生が言われたように原発が生きていて、放射線を放出し続けているのが確認できた。とりわけ 1～4 号機を眺めながら、原発事故により取り返しのつかない被害をもたらしたことに、心の底から怒りがこみ上げた。敷地一杯に広がるタンクや設備を見て、原発事故への際限のない困難な作業を実感した。廃炉作業の設備や「作業員」の群れに、原発事故処理にかかる膨大なエネルギーと費用を垣間見た。原発というものが、コスト的にもいかに割の合わないものかを、廃炉作業からも痛感した。

(2020年6月25日)